



▲ 活発化する中国との国際交流

社会科学院考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所の国際交流事業はここ数年、多方面に展開し、ことに中国とは、国家だけでなく、各省の研究所とも共同研究をおこなっています。その先駆けになった社会科学院考古研究所との交流事業は、1995年に結んだ「友好共同研究議定書」が今年6月に5年間の期限を迎えたので、8月21日に町田章所長が北京の考古研究所に赴き、新議定書に署名、新たな共同発掘について協議しました。

今年から始まる共同発掘の場所は、唐代長安城の太液池です。太液池は長安城の東北、龍首原上に営まれた大明宮にあります。規模は東西530m、南北330mあまり。蓬莱山など中嶋があり、池の周囲には多数の宮殿楼閣があったといえます。

太液は人の精気を司る気液のこと、これが満ちた池の意味でしょう。太液池はもとは漢長安城の建章宮の北にありました。唐代の池はその名前を襲名したものです。漢の太液池には蓬莱山、方丈山、瀛州の三山があり、亀魚を象るものがあったといい、実際に、太液池推定地では史料の魚にあたる石製魚も見つかっています。

ところで、唐の長安城には太液池の他に西内苑、禁苑など苑と池（宮）があり、対する平城宮にも松林苑、南苑と西池宮があつて、両者の関わりを示唆するようです。苑池は都城にとって重要な施設であり、太液池の調査は、日中都城制の解明に大きな手懸かりになると思います。



協定署名後の記念撮影 考古研究所